

氏名（本籍）	近藤 享子（茨城県）
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	博甲第 6715 号
学位授与年月	平成 25 年 10 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	Characteristics associated with empathic behavior in Japanese oncologists (日本がん治療医における共感的行動と関連要因)

主査	筑波大学教授	博士(医学)	朝田 隆
副査	筑波大学教授	博士(医学)	佐藤 幸夫
副査	筑波大学准教授	博士(医学)	笹原 信一郎
副査	筑波大学講師	博士(医学)	高屋敷 明由美

論文の内容の要旨

(目的)

まず難治がんの告知面接について、面談の画像を分析することで医師の基本属性に関するデータと、言語的、非言語的な共感行動の関連を明確にする。併せて高齢者の包括的評価方法である自己式質問紙 Vulnerable Elders Survey-13 (VES-13) の日本語版を作成し、高齢者を対象にその信頼性、妥当性を検証する。以上の 2 点を目的とする。

(対象と方法)

- 1) 難治がんの告知を行うという設定で、医師と模擬患者の面談を録画する。次に一定の基準に則って医師の面談中に見られた共感的な会話や行動を得点化する。こうして得られた得点と、対象となった個々の医師の年齢・性別・専門診療科・面談時間といった基本属性および臨床面における特性との関連の有無を解析する。
- 2) 高齢者に対する包括的評価法である VES-13 の日本語版を作成した。次に既存の包括的評価方法である Comprehensive Geriatric Assessment (CGA) は生活動作、合併症、栄養評価、認知機能、うつ病に注目した尺度である。65 歳以上の高齢のがん患者において、CGA と VES-13 の両者を用いた評価を行い、前者の結果を外的基準として後者の感度・特異度を検証する。

(結果)

1) 60名の医師(男性50名、女性10名)が参加した。注目した変数は、個々の医師の年齢・性別・専門診療科・面談時間等である。こうした変数と共感度得点との関連性について解析したところ、最終的な解析結果として、若い医師ほど共感度が高いことが明らかになった。

2) 65歳以上の144名のがん患者(男性105名、女性39名)が調査対象になった。CGAのカットオフ値を2/3点に設定した。この包括的高齢者評価スケールの得点を外的基準としてVES-13の日本語版の感度、特異度を算出したところ、前者は0.371、後者は0.937であり、また95%CI:0.633-0.853であった。以上の結果からは妥当性を確認することはできなかった。

(考察)

1) 若い医師ほど共感度が高いという結果については、教育の効果のみならず燃え尽き経験が少ないことも考えられる。共感行動への注目と実践は、単発で無く継続的に行って行く必要がある。そして医学教育のなかでもコミュニケーション教育において、とくに重要なものとして共感行動への注目と実践を提案したい。

2) VES-13日本語版の妥当性が示されなかった原因としては、対象としたがん患者集団におけるがん罹患臓器における偏りが考えられる。したがって今後は、調査の対象範囲を広げて、対象者を増やしてさらなる検討をする必要がある。

審査の結果の要旨

(批評)

高齢化社会の進行と共に高齢がん患者も増加し、その治療対応における告知の重要性とこれに関わる困難さが認識されるようになった。ところがこれまではこうした観点を定量的に研究した臨床研究は、わが国では存在しなかった。そこで近藤氏は医学教育上に不可欠な観点としてこの点に注目した。そして模擬患者という統制されたモデルを用いて、がん医療に従事する医師を対象にして医師の基本属性に関するデータと、言語的、非言語的な共感行動の関連を検討した。その結果、若い医師ほど共感度が高いことを明らかにした。若い医師ゆえの純粹さ、あるいは経験の乏しさがここに寄与するの否かは定かではない。しかしこのような共感行動は、医学教育とくにコミュニケーション教育において重視すべきであることは言うまでもない。そのような方向性の促進については、今後卒前・卒後教育におけるカリキュラムに取り入れるなど新たな試みが期待される。

次にVES-13日本語版についてはその妥当性を確認することができなかった。しかしこのような簡便な調査法が広く普及することで、多くの高齢患者が経験しがちな副作用や合併症への予防対応が容易になると考えられる。

今後の日本におけるがん医療が、担がん患者にとって少しでもそのQOLを改善する方向へと進化して行く上でも、本研究は欠くことの出来ない視座を示したものと言える。

平成25年8月26日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査員全員が合格と判定した。

よって、筆者は博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。